イエスの復活について　よくある質問に対する考察

Ｑ１．そもそもイエスは死んでなかったんじゃないの？

十字架刑は、残忍性が高く、ローマ帝国でも反逆者のみが受け、ローマ市民権保持者は免除されていて、最も重い死刑罰でした。

そして、公開処刑としてわざわざ丘の上で行われたため、民衆に対する再発防止としての「みせしめ効果」に加えて、殺人ショーとして「娯楽の一面」もあったと思われます。

よって、刑の執行が死で終わらなければ、処刑する側としては沽券に関わるし、娯楽として楽しんでいる者にとってもショーが完結しない。また、十字架刑は珍しくない頻度でたびたび行われていたので、その結末を知る者は少なくなかったと推察できます。

故に、イエスは十字架で死んだと結論付けるのが妥当ではないでしょうか。

Ｑ２. 復活したんじゃ無くて、誰かがイエスの遺体を盗んだりして隠したんじゃないの？

『自分は三日後に復活する』と言っていたのを、わたしたちは思い出しました。（マタイ 27:63）

弟子たちが来て死体を盗み出し、『イエスは死者の中から復活した』などと民衆に言いふらすかもしれません。（マタイ 27:64）

ピラトは言った。「あなたたちには、番兵がいるはずだ。行って、しっかりと見張らせるがよい。」（マタイ 27:65）

とあるように、処刑した側の警戒は万全でした。６５節の「番兵がいるはずだ」は直訳すると「番兵の一隊を持っている」となります。十字架刑を円滑に執行するためにピラトから借り受けていたローマ兵の一隊を、少なくとも後３日間、引き続き借り受ける許可をもらった場面です。訓練されたローマ兵の一隊が墓の前で見張っていたのですから、物理的に盗みを働く事は不可能と言って良いのでは無いでしょうか。

Ｑ３．いやいや、そこはどうにかうまくやって、やっぱ誰かが盗んだんじゃないの？

盗みに入れる状況ではなかった事は前項で触れましたが、なんらかの手段を用いて、仮に盗む事に成功したと仮定したとしても不自然な事が多いのです。

当時の墓は洞窟に石で封印する形で、その石はとても大きく、男が 20 人がかりでも動かせないぐらいの大きさでした。そして、イエスの復活後、二人の弟子が墓に行って「亜麻布が置いてあるのを見て信じた」（ヨハネ 20:6-8）とあります。もし泥棒が窃盗目的で行為に及んだとしても当時、高価だった亜麻布を放置してイエスの遺体だけ持ち去ったとは考えにくいですし、イエスの遺体に売却目的などの価値があったとしても、鞭打ちや十字架刑でボロボロになっていた遺体を包んでいた亜麻布を、わざわざ外すのは運搬上の不利益しか見出せません。

次にイエスの弟子（もしくは親イエス派）が盗み出したとして、**何処に隠したのでしょうか？**　処刑した側は、イエスの遺体さえ見つけてしまえば、弟子たちの主張する「復活」を完全否定でき親イエス派の拡大を抑制できましたし、十字架刑前のイエスの言動を成就させない意味でも、それこそ血眼になって捜索したはずです。

しかし、イエスの遺体は出て来なかったのです。

復活日（イースター）前後の教会暦

復活前主日（棕櫚の日曜日）　　２０１３年は３月２４日（日）

マタイ 21:1-11　８節「木の枝」
マルコ 11:1-11　８節「葉のついた枝」
ルカ　 19:28-40
ヨハネ 12:12-19　１３節「なつめやしの枝」＝「棕櫚の枝」
※ 棕櫚の木は、聖なる木、勝利や力の象徴

復活前月曜日、復活前火曜日、復活前水曜日

聖木曜日

「最後の晩餐」
マタイ 26:17～、マルコ 14:12～、ルカ 22:7～、ヨハネ 13:21～
「洗足」の日
ヨハネ 13:1～

聖金曜日（受苦日）　※ 断食日

イエスが十字架にかけられた日、聖餐式は行えない
マタイ 26:47～、マルコ 14:43～、ルカ 22:47～、ヨハネ 18:1～

聖土曜日

イースターヴィジル（徹夜祈祷会）　聖餐式は行えない

復活日　　２０１３年は３月３１日（日）

マタイ 28:1～、マルコ 16:1～、ルカ 24:1～、ヨハネ 20: 1～

※　復活前主日～聖土曜日までを「聖週」
聖木曜日・聖金曜日・聖土曜日を「聖なる３日間」と呼ぶ
イエスが復活したのは「３日後」ではなく「３日目」

イエスの十字架で最後の言葉

「エリ、エリ、レマ、サバクタニ。」（マタイ 27:46）
「エロイ、エロイ、レマ、サバクタニ。」（マルコ 15:34）
※ 意味は「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」
「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます。」（ルカ 23:46）
「成し遂げられた」（ヨハネ 19:30）

マタイとマルコの記述は、絶望の内の死と誤解されやすいが、神への讃美で締めくくられている「詩編 第２２編」の冒頭の言葉で、冒頭を引用する事で全体を表す意味がある。
詩編は大別して「賛美」と「嘆き」に分類され、嘆きの詩編は、

「嘆き」→「神への信頼表明」→「神への祈り（賛美）」

という構成になっている。詩編の嘆きは神の賛美の中に含まれている。

復活日（イースター）の日付について

毎年日付が変わる、移動祝日（２０１３年は３月３１日）
３月２１日以後の満月の後の最初の主日
もし満月が主日に当たるときはその次の主日　※ 祈祷書 ｐ１
（３月２１日が満月の場合、３月２１日の次の日曜日）
一番早いと３月２２日、一番遅いと４月２５日になる

最も早い３月 22 日は、最近だと 1818 年。次は 2285 年になる計算。
最も遅い４月 25 日は、最近だと 1943 年。次は 2038 年になる計算。

もともと復活祭は、ユダヤ教の「過越の祭り」（後述）と同じ日に祝われていたと考えられている。この祭はユダヤ教の政暦で固定されているので、平日に祝われることもあった。
しかし、キリスト教が他の地域に普及する中で、ローマをはじめ多くの教会では「イエスが復活した日曜日を主イエスの日」（日本聖公会ではこれをもって主日という）として優先するため「ニサンの月の 14 日の後の最初の日曜日」に祝う形に移行して行った。
２世紀頃、この両者の主張の相違によって起こった論争を「パスカ論争」という。
※ パスカは「過越の祭り」という意味
西暦 325 年におこなわれた第１ニカイア公会議で、復活祭を全教会で同じ日曜日に祝うことを決議したとされる。

計算方法が複雑なため便宜的に「春分の日の後の最初の満月の次の日曜日」と表現されるようになったが、厳密には間違いで「『春分の日』ではなく３月２１日」。「月齢は月の軌道が楕円であるため、13.8 から 15.8 の間で変動するが 14 日と固定して計算されている」ため、「地域ごとに観測できる満月」と「時差によって曜日」の関係に地域差が出る可能性があり、上記の表現と事実とが食い違う場合もある。

16 世紀になって西欧社会がグレゴリオ暦を採用したので、ユリウス暦を用いつづけている東方教会と復活祭の日付が食い違うようになった。（同日の年もある）
ちなみに 2013 年は、西方、３月 31 日。東方、５月５日と 35 日の誤差が出ている。

過越の祭り（出エジプト記 第１２章１～２８節）

ニサンの月の１０日（３～５節）
傷のない一歳の雄の羊（もしくは山羊）を選ぶ
ニサンの月の１４日（６～７節）
選んだ羊（もしくは山羊）を屠り、その血を家の入り口の二本の柱と鴨居に塗る
ニサンの月の１５日（８～１１節）　※１４日の日没
肉を火で焼いて食べる。（その他、作法や諸注意）

※「ニサンの月」は、第１月のユダヤ教で用いられている政暦の名前
※ 春分に最も近い朔日（新月の日）が元日。よって、現代のグレゴリオ暦だと３～４月

復活のシンボル

イースター・エッグ

卵は殻をやぶって雛が生まれることから、死という殻を破って**復活**した事を表す。

イースターバニー（ウサギ）

古代より、繁栄・多産のシンボル。
ウサギの目が、月を連想させ、月の満ち欠けで見えなくなっても
また満月となることから**復活**を表す。

十字架刑の絵画などでイエスの頭上にある「INRI」の意味

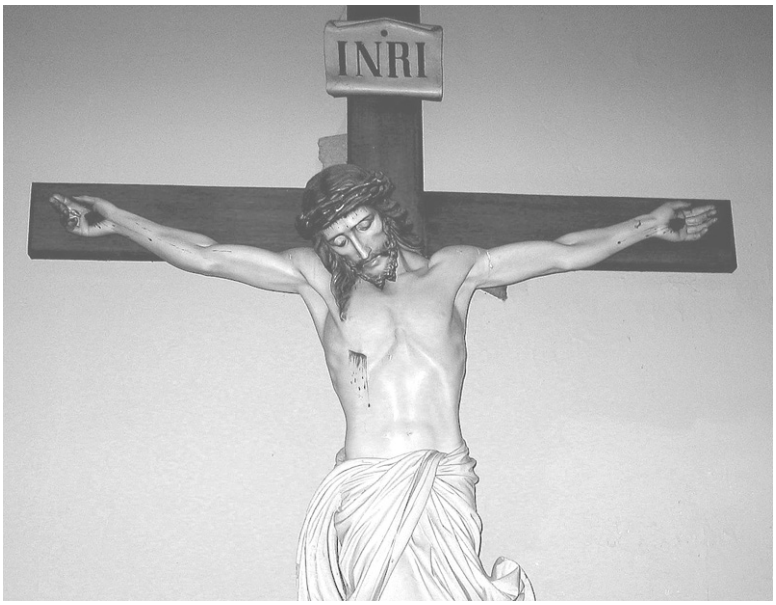
ラテン語の「Iesus Nazarenus Rex Iudaeorum」の頭字語
日本語では「ナザレのイエス、ユダヤ人の王」と訳される

Iesus	Nazarenus	Rex	Iudaeorum
イエス	ナザレの	王	ユダヤ人の

ギリシャ語だと「Ἰησοῦς ὁ Ναζωραῖος ὁ Βασιλεὺς τῶν Ἰουδαίων」で「INBI」になる

Ἰησοῦς	ὁ Ναζωραῖος	ὁ Βασιλεὺς	τῶν Ἰουδαίων
イエス	ナザレ	王	ユダヤ人の

ピラトは罪状書きを書いて、十字架の上に掛けた。それには、「ナザレのイエス、ユダヤ人の王」と書いてあった。（ヨハネによる福音書 19:19）



アメリカ・シンシナティのカトリック教会
画像は Wikipedia「INRI」より　http://ja.wikipedia.org/wiki/INRI